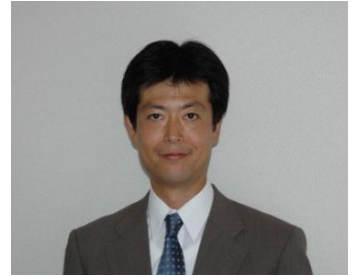


在学生の皆さんへ

岡村 未対 教授 コース長



国立大学の工学部というのは戦後我が国の産業を担う中心的な人材を育成する重要な役割を果たしてきました。現在700以上の大学がありますが、その中で50ほどの国立大学工学部の卒業生たちが我が国の産業を中心となって牽引してきました。君たちが学ぶ建設分野・土木分野も例外ではありません。

近年の一面的な報道では、公共事業や土木工事はあたかも悪者のように扱われ、イメージを大きく落としているのは皆さんも承知の通りです。しかし、土木の仕事、まちづくり、国土の整備や保全という仕事は未来永劫人間社会が存在する限りなくなりません。ギリシャ時代に立派な水道施設がありました。これからも少しずつ形を変えながらその時代にあった社会基盤施設を作っていく仕事を人類が存在する限り未来永劫続けいくのです。国立大学工学部の学生であることの誇りを持ち、日本の将来を担う重要な役割を演じるという気概を持って、これからの愛媛大学環境建設工学科在学中に大きく成長してくれることを期待しています。

今後の学生生活について君たちに対する私の希望を一つお話します。それは幅広いことを積極的に勉強してほしいということです。明日から早速授業が始まります。環境建設に関係する専門の科目や数学などは学科の先生方が教えます。一方、1年生はそのほとんどの授業時間が共通教育などにあてられます。これはいわゆる教養教育と言われており、やや軽視されている風潮もありますが、この教養の重要性をよく認識してください。それでは教養とは何か、辞書や成書には色々なことが書いてありますが、「人間が人間としてよりよく生きるための判断力や行動力を与えてくれるもの」です。もうすこし具体的に言うと、つぎの3つの軸を身につけることです。

歴史観(時間軸) 物事を過去からの流れで捉えることを可能としてくれるもの、

世界観(空間軸) 物事を広い視野にたって眺めることを可能としてくれるもの

生死観(価値軸) 人間や生命とは何かを考えることを可能としてくれるもの (草原克豪)

東京帝国大学の主任教授を20年以上務められたドイツ人のベルツ先生がこういうことを書かれています。この時代の帝国大学などの高等教育は、総理大臣よりも高給な優秀な外国人教授によって行われていた時代で、「ボーイズ・ビー・アンビシャス」で有名な札幌農学校のクラーク博士などがそうです。「日本人は、科学をなにかの機械のように考えているが、一種の有機体のようなものである。科学は、数千年もの間、幾多の人達がおびたしい血と汗を流し、身を焼かれながら示した道である。現在までに結実した理論や結果が重要なのではない」、と。木にたとえるなら、歴史や文化、精神といった土壤に根付き、根を張り太い幹と成ったのが科学であり、そのリンゴの実だけを収穫することだけに注意を注ぐのではなく、将来より大きく美味しい実を得るために土を耕し種をまき、木を育てることにもっと力を注ぐべきである、ということでしょう。

リーダーたるや、専門の知識だけではなく、地域や国、世界をどの様に幸せなものにしてゆくのか、それを支える社会資本のありかたを考えるため、教養は必須のものです。言われたとおりのものを建設するだけなら専門知識だけでも事足りますが、教養がなければ本当によりよいものを作ることは出来ません。新しい技術象としてそれが求められているのです。

教養は単なる知識として頭で理解するだけでなく、様々な人間や社会と実際に関わり合うことで一層強固なものとなってゆくものです。知識と体験が相俟って初めて本当の教養が身につくのです。大学での勉強はもちろんですが、その他にも読書、旅行、友人や先輩後輩・先生とのふれあいなど、色々なことに積極的に挑戦し、教養を身につけて、21世紀に活躍する技術者として大きく羽ばたいてください。環境建設工学科の教員も、授業カリキュラムの改革、23年度から始まる新コースの設立、FD活動などを通じて、精一杯支援していきます。